

日本独文学会

秋季研究発表会

2020年11月21日(土)・11月22日(日)

第1日 午後1時00分より

第2日 午前10時00分より

オンライン開催

参加費：無料

(学生非会員も無料，一般非会員は1,000円 ※要事前申し込み)

秋季研究発表会へのアクセスについてのご説明

今回、秋季研究発表会のオンラインでの開催にあたり、事前に口頭発表・シンポジウムの発表者が発表コンテンツを事前にオンライン公開し(11月7日～11月22日)、11月21・22の当日のZoomによるリアルタイムの発表会は質疑応答を主に行うハイブリッド方式を採用することになりました。

日本独文学会HPに設置される秋季研究発表会のページにて、事前公開コンテンツおよびZoomへのリンクを掲載する予定です。秋季研究発表会のページへのアクセス方法は、会員の皆様にdeutsch-MLでご案内いたします。

※口頭発表・シンポジウムと並行して以下の各書店によるオンラインブースが設置されますので、ぜひご訪問ください。

朝日出版社、郁文堂、三修社、第三書房、同学社、白水社、ひつじ書房

日本独文学会

〒170-0005 東京都豊島区南大塚3-34-6 南大塚エースビル603

Tel/Fax: 03-5950-1147

E-Mail(メールフォーム): <http://www.jgg.jp/mailform/buero>

第1日 11月21日(土)

入室開始：12:30

開会の挨拶(13:00～13:10)

(チャンネル1)

北陸支部長 宮内 伸子
会 長 宮田 眞治

シンポジウム I (13:30～14:45)

(チャンネル1)

「詩人たちの時代」の終わり？
Ende der „Epoche der Dichter“ ?

司会：益 敏郎

1. 神なき時代の「すべてよし」——ポスト・詩人たちの時代とヘルダーリンの
パトモス讃歌 益 敏郎
2. 哲学と詩の縫合を解く——バディウのヘルダーリン論をめぐって
林 英哉
3. 「詩人たちの時代」のジャンル史論的考察 小野寺 賢一
4. 「固い結合」の美学——ヘリングラートによるヘルダーリンの再評価と文学
的モデルネ 大田 浩司
5. 哲学と詩の新たな「縫合」？——バディウ『哲学宣言』におけるツェラン
林 志津江

シンポジウム II (13:30～14:45)

(チャンネル2)

家庭／家族の文学史 — 制度と虚構
Literaturgeschichte der Familie – Institution und Fiktion

司会：吉田 耕太郎

1. 感情と家庭 — そのバリエーションと社会的背景の再考 吉田 耕太郎
2. 家庭のなかのニヒリストたち — 19世紀の家庭雑誌とカール・グツコー『家のかまどの団欒』誌 西尾 宇広
3. シュトルムの『白馬の騎手』における家族という幻影 藤原 美沙
4. 「家庭」と「家族」をめぐる葛藤 — M. ハウスホーファーの作品世界 高井 絹子
5. ジェンダー規範を（再）構成する場としての家族 — イェリネク『スポーツ劇』を中心に 福岡 麻子

シンポジウムⅢ(15:00～16:15)

(チャンネル1)

生誕100年〈世界文学〉の中のパウル・ツェラン
——その翻訳と受容の多様性

**100 Jahre Paul Celan—Zur Vielfalt von Übersetzung und Rezeption im
Rahmen der Weltliteratur**

司会：関口 裕昭

1. ユーラシア大陸の西と東における〈世界文学〉—パウル・ツェランと金時鐘をめぐって 細見 和之
2. オーシプ・マンデリシタム：異国語性からの世界文学 斉藤 毅
3. <第二世代>のユダヤ系作家におけるツェラン受容と展開——ツェランからシンデル、ベッカーマンへ 福岡 具子
4. 〈死後の生〉あるいはツェラン的言語の系譜—ヴィンクラー、ウォーターハウス、多和田 関口 裕昭

口頭発表：語学/ドイツ語教育Ⅰ (15:00～16:20)

(チャンネル2)

司会：西出佳代，阿部美規

1. 説明場面におけるドイツ語付加疑問の相互行為的機能についての一考察 木村 英莉子

2. ドイツ語の授業の反転化による授業外学習時間の確保と学習成果の可視化
今村 武
3. ドイツ語授業における瞑想に対する評価 ―学生のアクセプトランスの研究
を中心に―
Luisa Zeilhofer

シンポジウムⅣ(16:30～17:45)

(チャンネル1)

言語を逍遙する詩人、多和田葉子の文学をめぐって
Zur Literatur der Sprach-Wandlerin Yoko Tawada

司会：土屋 勝彦

1. 多和田文学におけるハムレット
齋藤 由美子
2. *Der wunde Punkt im Alphabet* から「アルファベットの傷口」へ ―多和田葉子の『文字移植』の翻訳における越境
谷本 知沙
3. 鏡合わせのテクスト ―多和田葉子の『ボルドーの義兄』および *Schwager in Bordeaux* 試論
越川 瑛理
4. 多和田葉子の戯曲 ―*Dejima* から *Kafka Kaikoku, Ein Schmetterling fliegt übers Meer* へ
谷口 幸代
5. 多和田葉子の小説作品における「語り」について
松永 美穂

口頭発表：ドイツ語教育Ⅱ (16:30～17:20)

(チャンネル2)

司会：志村 恵, 黒田 廉

1. 日本におけるドイツ語保持の諸相 ―京都ドイツ語補習教室の試みを中心に―
馬場 わかな
2. 筆記力向上のための短文作成を目的とするマルチリンガルワークショップの効用について
柴田 育子(共同発表者:Lisa Gayle Bond)

第2日 11月22日(日)

シンポジウムV (10:00~11:15)

(チャンネル1)

「オリジナル」とはどういうことか？
—近現代ドイツ語圏文学における複製の問題圏—
Was ist ein Original? Problematiken der Reproduktion.

司会：由比 俊行

1. 苦悩する分身 —クライスト『アンフィトリュオン』(1807)におけるユピター像— 由比 俊行
2. 他者の中のオリジナル —シュトルムの『ドッペルゲンガー』(1886)におけるヨーン像— 藤原 美沙
3. 複製化する非身体としての自己 —カール・デュ・プレルのドッペルゲンガー論— 熊谷 哲哉
4. 複製と歴史 —ベンヤミンからグロイスへ— 宇和川 雄
5. 「作者」の/と複製 —C. J. ゼッツ『BOT. 作者なき対談』を例に— 福岡 麻子

口頭発表：文学I (10:00~11:20)

(チャンネル2)

司会：磯崎康太郎, 宮内伸子

1. ビューヒナー『レンツ』における近代的自我の歴史哲学的考察 堀田 明
2. ハンス・ハインツ・エーヴェルス『フロントフォーゲル』(1928)における性転換手術について 相馬 尚之
3. Der Fremde! Ein Wiedergänger – Elfriede Jelineks Prosadebüt und Nicolas Mahlers Comic-Adaption Herrad Heselhaus

シンポジウムVI (11:30~12:45)

(チャンネル1)

ベンヤミンの経験への問い
——1930年代を焦点に——

Die Frage nach der Erfahrung bei Walter Benjamin
—Ausgehend von seinem Denken in den dreißiger Jahren—

司会：柿木 伸之

1. ベンヤミンの経験概念 ——変容と回帰—— 茅野 大樹
2. 「洗っていない子どもの手」 ——ベンヤミンの児童書蒐集—— 田邊 恵子
3. ベンヤミンのボードレール論とジョゼフ・ド・メーストル 影浦 亮平
4. ミッキーマウスの経験 ——後期ベンヤミンにおける経験概念——
竹峰 義和

口頭発表：文学Ⅱ/文化・社会 (11:30~12:20)

(チャンネル2)

司会：吉田治代, 名執基樹

1. Klassiker – New Weird? Komplexe Sprache – Einfache Sprache? Fragen zur
Literaturdidaktik im japanischen Deutschunterricht Matthias Grünwald
2. ドイツ語圏モダニズムの芸術人形劇—リヒャルト・テシュナーを例として
山口 庸子

閉会の挨拶 (12:55~13:00)

(チャンネル1)

黒田 廉